
愛と医者の召喚獣

天読

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と医者の召喚獣

【Zコード】

N4130N

【作者名】

天読

【あらすじ】

神の腕を持つと言われている医者の娘で、世界最年少で医者になつた『西川歩美』。彼女は留学のために小学生の頃に離れ離れになつた『彼』に会うために文月学園に入学した。
勉強ばかりだった留学時代分の青春、そして3年間彼に会えなく溜まつた欲求を満たすがごとく、彼女の高校生活が幕を開ける。

プロローグ

学園長室、そこで一人の人間が話し合っていた。

「あんた、半年前に免許取つたんだろ？ だつたら高校なんかに来てないで働いたらどうだい？」

目の前の白衣の女性に嫌味つたらしく言い放つ老婆、この文月学園の最高権力者、藤堂カラル学園長。

「貴女みたいに老いた人間には理解出来ない理由があるんですよ」

妖艶な笑みを浮かべ、嫌味を嫌味で返す白衣の女性。

「小学校卒業後、アメリカに留学して最年少で医師になつた“天才”の考えなんて私には分かるわけないさね」

「あら、天才科学者の藤堂カラルさんにそつ言われるとは光榮ですね」

「…………あんたに言われても嫌味にしか聞こえないさね」

クスクス笑いながら言う女性に皮肉たっぷりに言い返す学園長。

「で、なんでFクラスがいいんだい？ あんたはどう考えたって学園一の頭脳を持っているのに」

こんな無駄話をしていても、ストレスが溜まるだけと判断した学園長は、本題に切り替える。

「眞面目に勉強したくないからですけど」

「…………あなたは何のためにこの学校に転入してきたんだい」

女性の返答に、大きな溜息をつく学園長。

「それじゃ、Aクラスには“彼”がいます」

「なんだい？ 知り合いでいるのかい？」

「か、 彼氏です」

「…………まさかそんな理由で入学してきたとはね」

頬に手をあて、顔を真っ赤にして幸せそうな表情を浮かべる女性を見て、学園長は再び大きな溜息をつく。

「で、 なんでその彼氏と同じクラスにしないんだい？」

「彼は頭がいいから、絶対にAクラスに在籍していると信じているんです。それに彼は優しくて、カッコ良くて――――」

「そんなことは聞いてないさね――！」

問い合わせと全く関係ない惚氣話をし始めた女性に大声で怒鳴る学園長。そんな学園長の態度に少し不機嫌そうな表情を浮かべる女性。

「私がAクラスに入つたら、彼に所構わず甘えてしまって授業の邪魔をしてしまうからです。 だって、彼は優しくて、とても

カツ「良く――――」

「はいはい分かったよ！ Fクラスへの編入を認めるよ…… 制服は後日届けるからさつさと教室に行くさね！――」

女性が再び惚氣話を始めようとしたので、 学園長は強引に話を終え早く部屋から出て行くよつて言ひ。

「はあ、 トシ君。 早く会いたいよお」

そんな学園長の言葉も聞こえないくらいに、 妄想の世界に入り込んでしまっている女性。

「…………また手のかかるクソガキが増えたさね。 西村先生！――」のクソガキをさつさと連れて行きな――」

今日何度もかの溜息をつき、 部屋の扉に向かって一人の教師の名を呼ぶ。

「失礼します学園長。 編入生の西川歩美医師は…………彼女ですか？」

学園長室に入ってきたスポーツマン然とした教師、 西村先生は妄想世界から帰つてこれでいい歩美を見て、 困惑の表情を浮かべる。

「そうだよ。 これがあの西川泰造の娘さね」

「はあ、 天才は何かと変わった人物が多いと言いますが、 本当のようですね」

「天才と変人は紙一重つて」とさね

「・・・・・」

学園長の発言に對して、あんたが言えることか？ とでも言いた
げな西村先生だつたが、特に何も言わず妄想世界にいる歩美を連
れて学園長室を後にした。

第1問

「間に合つたー！」

FクラスとAクラスの試験召喚戦争が終わって4日後の朝、明久はいつも通り遅刻ギリギリに教室に飛び込んだ。

「おはようアキ」

「おはようござこます明久君」

「おはよう姫路さんと美波。……………ヒジリで雄一達と何してるの？」

明久に笑顔で挨拶をする一人に、教室の一一番後ろのダンボールで集まっている理由を聞く明久。

「おはようじや明久。何でも今日Fクラスに転校生が来るといつ噂があるのじや」

「転校生？」

「……………女子らしい」

「女子！？ それは本当なのムツツリーーーー？」

転校生が女子ということを聞いて、目を輝かせる明久。

「留学先のアメリカから日本に帰ってきたらしいぜ」

「じゃあ英語とかペラペラなのかな？」

「多分そうだろ？　」いや、試験戦争の戦力になること間違いなし
しだぜ」

明久とは違つ觀点で目を輝かせる雄一。

『転校生の女の子。ついに俺にフラグが立つたぜ！』

『お前に立つのはいつでも失恋フラグだろ？　転校生ちゃんは俺が
いただくぜー！』

他のFクラスの男子も、胸に無駄な期待を抱いてバカ騒ぎしてい
る。

「おい貴様ら静かにしろ」

そんなバカ騒ぎしている教室に、Fクラスの担任である西村先生
が疲れたような顔をして入ってきた。

「えー、貴様らの様子を見る限りもう知つていると思うが、今
日はこのFクラスに転校してきた生徒を紹介する」

西村先生が廊下側に向かつて入れと言つと、扉から白衣を着た女
性、西川歩美がゆっくりとした足取りで入ってきて、黒板に自
分の字を書く。

「アメリカから転校してきました西川歩美です。よろしくね」

そして大人びた笑顔を浮かべながら自己紹介をする。

『 『 『 』 』 』 』 』 』 』 』 』 』 』

その瞬間、あれ程バカ騒ぎしていたクラスが静まり返る。そして

『 『 『 眼福じやああああああああああ！－（ブシャアアアアツ－）』 』 』

鼻血をすごい勢いで噴出するバカ達。Fクラスから歩美への歓迎のおもてなしは、血の噴水という形になった。

オリキャラデータ（前書き）

物語が進むにつれて、 さらに更新していくかも。

オリキヤラデータ

西川歩美
にしかわあゆみ

年齢 16歳

性別 女

所属 Fクラス

小学校卒業後、アメリカに留学して最年少で医者になつた天才少女。本人は脳外科医だが、他の分野の知識も持つている。

両親も医者をやつており、父親は神の腕を持つと言われている。16歳という若さで日本での手術を成功させたが、世間ではその若さゆえに手術を行つたことについて賛否両論が飛び交つた。本人は自分でどれだけの人数があの手術を成功させられた?と、あくまで自分の行つた行為を正当化している。

文月学園に入学した理由は、小学生のころに離れ離れになつた彼に会つため。

親の病院で働いているため、医者としての仕事は学校の二の次とうわがままもきいている。

第2問

「あら? みんなどうしたの?」

歩美は自分の笑みがFクラスの鼻血の噴水を作り出したといつこと
に気付いてなく、首を傾げる。

「気にするな。」いつらの頭がおかしいだけだ

「へえ、頭がおかしいの」

雄一は自分の級友達に対して平氣でバカにしている発言をし、それを聞いた歩美は興味を示す。

「私、脳外科医をやっているんだけど まだあまり入刀したことないから、経験のために何人かいただけるかしら? 腕はそこいらの凡骨医者よりもずっとといいから、脳の異常も治せるかもしれないわよ?」

「脳外科医!? その年でか!?」

「待つんじゃ雄一! シツコミ所はそこではないのでは!?」

自分が医者であり、経験のためのモルモットを何人か寄越せと先程とは違うあくどい笑みを浮かべる歩美に対して、雄一は級友のことよりも脳外科医であることについての驚きを示し、そんな雄一に秀吉はツツコミをいれる。

「西川さん。それって冗談よね?」

「冗談？ 私が医者であることも入刀したいってことも全部本当よ」

「でも手術つてことは失敗したら死んじゃうんですね？」

「そんなの当たり前じゃない。 特に脳の手術は少しでも失敗したら即死ぬわ。 でも私が手術を成功させたら急に鼻血を出すこともなくなるかもしないわよ？ その赤髪の男の子の言う通り頭がおかしいから鼻血が出ているんだつたらね。 まあ失敗しないと言いつければしないわね。 私だつて人間なんだから」

先程からずっと黙っていた美波と姫路も、 歩美の常識では考えられない発言につい口を挟むが、 歩美は平喘と常識はずれな受け答えをする。

「そんな無責任な」

「その無責任さを無くす為に、 彼らに入刀させて欲しいんじゃない。

人の腕ではなく、 神の腕まで成長することができたら失敗することだつてなくなるかもしないわよ？ その為に彼らが犠牲になつたとしても、 それは名誉なことよ」

歩美の発言に信じられないというような反応を見せる女子二人と秀吉だが、 歩美は罪悪感の欠片も感じていないように言い放つ。

「ま、 僕には関係ねぇし好きにしてくれや。 ちなみに一番鼻血をだしやすいのはそこカメラを持った奴で、 一番バカなのは俺の二つ隣のマヌケ面した奴だ」

「あなたとても親切なのね。 ありがとうございます」

しかし雄一は自分には関係ないと言い張り、さらには明久とムツツリー一を生贊に差し出し、歩美は雄一に笑顔で礼を言つ。

「だ、 だめです！ 明久君の手術をしても無駄です！！」

「そうよ！ アキの頭はもう末期なんだから絶対に助からないわ！」

「 貴女達見た目によらず結構ひどいわね」

生贊に差し出された明久を救い出そうと反論の意見を出す姫路と美波だが、明久をバカにした発言になつており、歩美は苦笑いを浮かべる。

第2問（後書き）

歩美は「彼」以外に対しては結構冷たいこともあります。

第3問（前書き）

初感想を書いてくださった、まあさん。 ありがとうございます。
感想を書いてくださった方には、 前書きで改めてお礼を言わ
せていただこうと思つております。 では、 第3問出題です。

第3問

「まあ、その子は頭がおかしくても貴女達に愛されている様だから入刀はやめとくわ」

「え！ な、なんですかいきなり！？」

「そ、そ、う、よ、ー、なんで私達がアキのことなんかを好きになるのよーーー！」

「はいはい。ツンデレはみんなそう言つわ」

歩美は一人の様子から明久に好意を抱いていると推測し、図星をつかれた二人は慌てて反論するが歩美はそれを軽くあしらつ。

「その代わり、ここのカメラの子は私がいただくわ」

「……………食われるー？（ブシャアアアアア）」

明久に興味がなくなった歩美は、ムツツリーーを患者として連れて行こうとするが、違う意味で受け取ったムツツリーーは大量の鼻血を噴出し

『『『異端者には死を！』』』

復活したFクラスの生徒達も、同じく違う意味で捉え、出血多量のムツツリーーを抹殺しようとして動くが

「私の患者に手を出さないで」

手術の邪魔をされたたくない歩美は白衣のポケツトから催涙スプレーを取り出し、容赦なくFクラスの生徒達に発射する。

『皮膚が焼けるーつ！』

FFF団のお馴染みの覆面を被つてない生徒達は、スプレーをまと
もに受け、　皮膚に火傷のような激しい痛みを感じて悶える。

「なんでそんな物が白衣から出てくるのじゃ？」

「護身用アイテム。他には液状型やピストル型やその他色々。
貴女も可愛いんだからナンパ対策にちゃんと携帯しないとダメよ?」

「ワシは異じやー！」

秀吉は何故ポケットに催涙スプレーなんかが入っているか聞くと、護身用ということで他にも色々な形状の催涙スプレーを取り出し、秀吉にもナンパ対策として薦めるが、女扱いされた秀吉は声を荒げるが、

「男? 何を言つてるの貴女はどう見たつて あ、そ
ういうこと。貴女性同一性障害ね。そういうことなら今はもうカメ
ラの子には用はないわ。 ねえ、私もしかしたら性同一性障害を
治せるかも知れないのよ。 そうしたら医療界初の快挙だわ。 とい
ふことで貴女私の患者ね。 大丈夫。 麻酔はここにあるから」

「違うのじゃ！ ワシは正真正銘の男じゃ！！ 西村先生も何か言つてほし——」

「鉄人ならさつき職員室に戻つたぞ」

「な、なんじゃと！？ ちょ、ちょっと待つのじゃ西川！ やめつ・・・・・！？」

「大丈夫。痛いのは最初だけ。後は何の抵抗も出来なくなるから安心して」

その発言は結果的に歩美の医者として的好奇心を刺激し、手をワキワキさせながら秀吉を患者にしようと迫り、そんな歩美に恐怖を感じた秀吉は西村先生に助けを求めるが、雄一の衝撃的な告白により抵抗する手段がなくなつた秀吉は腰に左手を回されそのまま抱き寄せられ、歩美は右手の注射を突き刺そうとする。が、

「歩美！ 何をしているんだ君は！？」

「痛つ！？ 誰よいきなり頭を叩いたの・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

背後から急に頭を叩かれ邪魔をされた歩美は怒りで声を荒げるが、後ろを振り返つて自分を叩いた人間を見て、驚愕で言葉を失つた。

「全く。アメリカに留学した3年間、人間としては何も変わってないようだね」

「ト、トシ君 ?」

その人間は小学生の頃に離れ離れになり、歩美が文月学園に入
学したただ一つの理由を作った「彼」。文月学園2年生学年次席
の「久保利光」だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130z/>

愛と医者の召喚獣

2011年12月16日22時50分発行